齋藤茂吉著

〔アララギ叢書第百廿四篇〕

歌集 遍歷

波書店刊行

昭和二十三年四月一日印刷
昭和二十三年四月五日發行

遍歷
定價貳百圓

著者　齋藤茂吉
東京都千代田區神田一ツ橋　岩波書店内

編集者　布川角左衛門
東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地

發行者　岩波雄二郎
東京都西多摩郡霞村根ケ布三八五番地

印刷者　山田一雄

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三　岩波書店
會員番號A一〇九〇〇四號

株式會社大化堂印刷・製本

目次

ミュンヘン漫吟 其一（百四十二首）……三
ミュンヘン漫吟 其二（六十四首）……七二
ドウナウ源流行（七十五首）……一〇六
山の旅（三十五首）……一四〇
ガルミッシュ行（十八首）……一五四
獨逸の旅（七十九首）……一六二
最後のミュンヘン（九首）……一九四
巴里雜歌 其一（三十九首）……二〇一

歐羅巴の旅（百二十二首）……二三〇
巴里雜歌 其二（八十二首）……二七〇
歸航漫吟（百六十三首）……三〇九
後記……三七五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ミュンヘン漫吟

ミュンヘン漫吟　其一

大正十二年（西歴一九二三年）七月十九日午後九時五十分ミュンヘンに著く。七月二十一日シュピールマイエル教室に入りぬ

初學者のごとき形にたちもどりニッスル染色法をはじめつ

僧侶ひとりルックサックを負ひて行く民顯の
市の街上にして

新しき方嚮の繪畫來て見たり"neusachliche Malerei"
と謂へり

この教室に外國人研究者五人居りわれよりも
皆初學のごとし

七月二十三日（月曜）、途上

大馬（おほうま）の耳を赤布（あかぬの）にて包みなどして麥酒（ビイル）の樽（たる）を
高々はこぶ

維也納（ウインナ）より來りて直ぐに氣づきたりこの市（し）に
自轉車の甚だ多きを

バヴァリアの峡の農民に東洋の種族に似たる顔いくらもあり

七月二十六日（木曜）、驟雨屢來

バヴァリアは山高けれや雷のあめ業房の窓をふるはせ降りぬ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

七月二十八日（土曜）、エトス食店、神經精神病學會

Ethos（エトス）といふ野菜食店（やさいしょくてん）に來て見るに吾等にはさしたる感動もなし

大戰後はじめて開く學會にまだいたく若き學者も來て居る

ベルリン。七月三十日（月曜）伯林に行き、大使館を訪ひ、シャリテの病院を訪ひ、カイゼル・フリドリヒムゼウムを訪ひ、民族館、前史館、國民美術館、水族館等を訪ひ、書肆を訪ひ、親しき友と會談す（前田茂三郎、下田光造、小宮豐隆、茅野蕭々、上田春次郎、出井淳三、柿沼昊作諸氏）。八月十二日（日曜）午前八時五十二分伯林を立ち、午後十時十三分にミュンヘンに著きぬ

ベルリンに吾居るうちに一ポンド五ミルリオンより十四ミルリオンとなる

赤き色したる刺身を食ひながら「同胞の哄笑」と
いふを聞き居り

嘗て見しレムブラントを見に來り我が體豐け
く何とも言へず

この首都に十日餘りゐて „Valuta-Materialismus“ と
いふ語をおぼえて歸る

大きなる動きを祕めてこの首都は悲しき眼光(がんくわう)をわれにも與ふ

八月十四日(火曜)、一ポンド一六ミルリオーンとなる。シュビール
マイエル先生と談る

「小腦の發育制止」の問題を吾に與へておほどかにいます

八月十五日（水曜）、祭日（Mariahimmelfahrt）植物園、ニュンフェンブルク、麥酒店レエウェンブロイ、伊太利料理

山ちかきゆゑとおもへばこころよしいきほふ
水に魚群（むら）がるを

八月十九日（日曜）、冷、驟雨、ミュンヘン一月目なり

この都市にわれ著きしより一月ははやくも過ぎて部屋定まらず

夜毎に床蝨のため苦しみていまだ居るべきわが部屋もなし

いつしかも時のうつりと街路樹が青きながらに落葉するころ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook